第1章

いま，なぜフィールドワークなのか

フィールドワークの一般的方法論についてはすでにいくつか概説書が出版されているが，本書は，すでにフィールドに出た経験がある人なら誰もが頭を悩ませること，つまりフィールドで得られた情報を，いかに自分の問題関心の解明に近づくよう整理すればよいのか，その試行錯誤のプロセスをひとつひとつ解きほぐしていくことに主眼を置いている．

はじめに

フィールドワークという方法論がいろいろな分野で取り入れられ，多くの人によっておこなわれるようになってきた．そのことを反映し，フィールドワークに関連する多くの本が出版されるようになった．ためしに，国立国会図書館に所蔵されているフィールドワーク関連本を検索し，時代別に並べてみると，図1－1のような結果になる．

この図から大きくふたつのことが読み取れる．ひとつは，フィールドワークに関連する本がこの50～60年の間に250冊以上出版され，そのうち，およそ半数以上は1990年代後半以降に出版されていること．もうひとつは，1970～74年と，90年代後半以降のふたつのピークがあるということだ．出版された本の内容を見ると，1970～74年のピークは，公害問題に対する関心の高まりを反映し，自分たちの身近で起きている環境変化をどうやって知ることができるのかに焦点をあてた本が多い．たとえば、田辺弘也（1971）『残留農薬の分析』

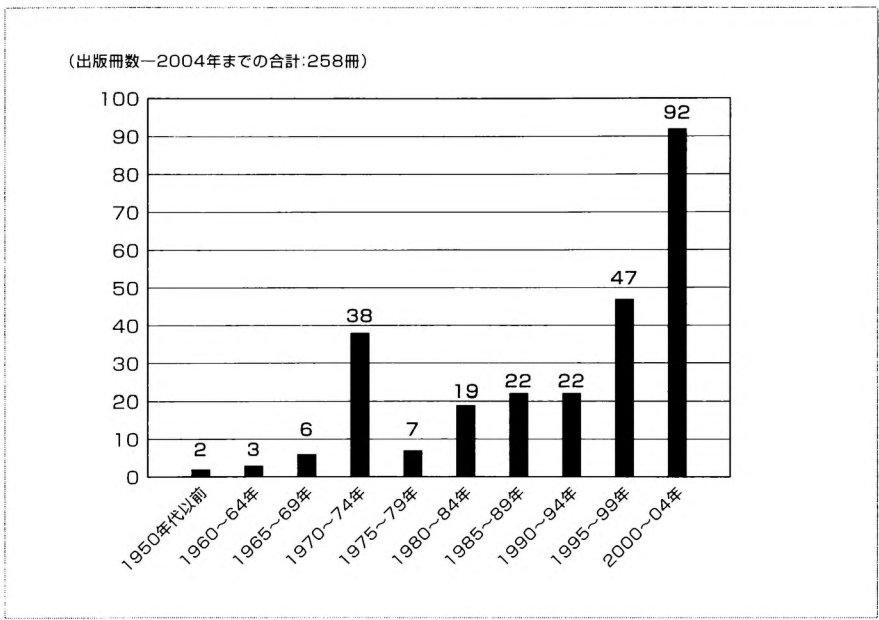

図1-1 フィールドワーク関連図書の出版部数の変化
出所：国立国会図書館（http://www.ndl.go.jp/）の検索システムNDL-OPACにて，「フィールドワーク」，「野外調査」，「臨地調査」をキーワードとして検索し，ヒットした書籍を出版年ごとに並べたもの（2004年12月31日までに出版されたものを対象）．

や西田耕之助（1971）『交通機関排気ガスの分析』（ともに講談社）といった本がフィールドワークシリーズとして出版されている．では，90年代後半以降の増加はどのような理由からだろうか．

フィールドワーク関連本の増大とその社会的要請

そのことを知るためには，1980年代後半からの世界の変化をみる必要がある．80年代の後半は，20世紀のひとつの転機であった．政治や経済のシステムの変化にともない，かつてないレベルでの人の移動や交流がおこなわれるようになった．グローバルな価値観や言説が世界のすみずみまで影響をおよぼすようになるとともに，ローカルな地域ごとの論理も重視されるようになってきた．異文化との出会いが多くの人にとって日常的な事柄になり，それとともに，さまざまな摩擦や軋轢も生まれてきた．そうした問題を解決する主体としての国家の役割が再考されると同時に，市民による政策プロ

セスへの参加が推し進められた．市民ひとりひとりが調査し，自分たちの社会やコミュニティを運営する度合いが増えるようになった．NGOや各種ボランティア団体に所属し，海外での活動を開始する人の数も急増した．

こうしたことを背景として，国を超えて，自分たちの社会のあり方や自然とのつきあい方などを研究することに関心を持つ人が増えてきた．世界中でこれだけ多くの人が研究という領域に関心を持ち，実際に研究活動をおこなうようになったのは，人類史上初めてのことである．研究はもはや研究者だけによっておこなわれるものではなくなった．

フィールドワーク

現実の人間の社会や人びとの暮らし，自然とのつきあい方などをありのままに研究するためには，さまざまな手法が必要とされる．過去の文献や各種資料の収集と分析，インタビューや質問票を利用した聞き取り，現場での計測や参与観察などである．こうしたすべての調査手法を総称して，本書ではフィールドワークと呼ぶ．1980年代後半以降の世界の変化の中で，かつては主に人類学や社会学の研究手法のひとつであったフィールドワークが，もっと広い場面で利用されるようになった[*1]．新しい目的，新しいテクニック，新しい考え方がフィールドワークによる研究につけ加えられ，それらをとりまぜた新しいフィールドワークによる研究の方法論が求められている．フィールドワーク関連本の増大はそのことを反映している．

*1 1990年代後半以降に刊行されたフィールドワーク関連図書の一例として以下がある．須藤健一（1996）『フィールドワークを歩く――文科系研究者の知識と経験』嵯峨野書院，好井裕明・桜井厚（2000）『フィールドワークの経験』せりか書房，岩波書店編集部（2004）『フィールドワークは楽しい』岩波書店など．2005年以降では，アジア農村研究会（2005）『学生のためのフィールドワーク入門』めこん，菅原和孝（2006）『フィールドワークへの挑戦――“実践”人類学入門』世界思想社がある．

フィールドワークによる研究

フィールドワークは方法論であり，フィールドワーク研究という特定の分野があるわけではない．社会や人びとの暮らしを研究することは，フィールドとする社会や人びとと関わることである．フィールドワークは関わりの方法論である．

フィールドワークを方法論とするのは，さまざまな学問分野（ディシプリン）だけでなく，実際の政策立案から，個人が外国で生活するときの現地での観察という場面までありうる．そして，それぞれの分野や場面で，フィールドワークによる研究の方法論は異なる．したがって，個々人に適した出来あいのフィールドワーク方法論というものは存在しない．それは，研究者個人が独自に作り出す必要がある．

しかし，フィールドワークによる研究が実際におこなわれるプロセスをもっと詳細に見てみると，それぞれのディシプリンに特有の方法があるとともに，フィールドワークに共通する試行錯誤がある．フィールドワークで得たデータを分析し，まとめるためには仮説の立て方やサンプルの取り方，分析の方法，論旨の展開に一定の作法があることに気づく．これこそが，フィールドワークにもとづく研究の方法論であり，論理である．分野や目的を超えて，フィールドワークによる研究の共通の問題点とは何か，フィールドワークによる研究を遂行する上で，それをどのように解決するのか．そのことを，実際に公表された研究論文を題材にして考えることが本書の目的である．フィールドでの事実とは何か、フィールドでデータをどのように集めるのか，それらをどう分析し最終的な成果として紡ぎだしていくのかについて検討し，フィールドワークによる研究の多様なプロセスを議論する．

実際の研究論文を題材とする

本書では，若手研究者や大学院生によって発表された実際の研究論文を主な題材とする．その理由は次の通りである．フィールドワークによる研究の方法論に関する本は，冒頭で見たように，すでに多数出版されている．その中には，すぐれた概説書も多数ある[*2]．

しかし，フィールドワークの経験があり，そこで得られたデータをいかにしてまとめるのかについて頭を悩ませている

*2 たとえば，佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』新曜社，箕浦康子編著（1999）『フィールドワークの技法と実際——マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房，川喜田二郎（1967）『発想法——創造性開発のために』中公新書など．

人たちにとっては，一般論を述べるよりも，具体的な例を示し，なぜそのようなプロセスを選択したのかを考えるほうが理解しやすいのではないかと考えた．一般論の説明では，それを自分の研究にひきつけてどのように理解できるかに解釈の余地がある．たとえば，「仮説を立てることが大切である」，「仮説と思い込みは異なる」，「さまざまな方法論の長所短所を理解したうえでデータを取得するべきである」といった説明が具体的に何を示しているのかは，フィールドワークの経験によっても異なることがあろうし，なによりも，具体的な指針にはなりにくい．

そこで，実際の調査結果やフィールドワークの成果をもとに，フィールドワークによる研究のプロセスの中で，実際におこなわれていることを具体的に議論しようとするのが本書のねらいである．

想定する読者

本書が想定しているコアな読者は，フィールドワークを予定している，あるいは，すでに経験のある大学院生ならびに若手研究者である．しかし，先述したように，フィールドワークによる研究はもはや研究者のみの専有物ではない．多くの人がフィールドワークによる研究に従事していることが示すように，学問的な目的だけでなく，現代の社会問題に対処するためにもフィールドワークが多くの場面で利用されている．フィールドワークをするすべての人に読んでもらいたいと考えている．

本書の構成

フィールドワークによる研究は，一般的には，フィールドでの事実の発見から始まり，さまざまなデータの取得と分析，一般化・モデル化，さらなる普遍化と進むと考えられる．このプロセスに沿って本書は構成されている．章ごとの概要は

以下の通りである．

まず第2章では，フィールドでの事実とは何か，何が発見なのかについて考える．研究者自身の気づきからスタートし，研究上の発見に至るまでのプロセスを概観し，最初の気づきの中に，その後の調査の方向を決定づけるような発見があることを述べる．フィールドワークによる研究は知的興奮からスタートする．

第3章と第4章では，データを取得し分析する方法について考える．自然科学的な調査ではフィールドで計測や実験がおこなわれ，社会科学的な調査ではインタビューや参与観察などの調査がおこなわれることが多い．もちろん，それらの複数が利用されることも多々ある．第3章では，計測や実験によって得られたデータをもとにして仮説を検証する過程を考える．ふたつの論文を題材とし，最初の論文では，複数の状況証拠を利用して仮説を検証する過程を取り上げる．もうひとつの論文では，調査対象の設定を工夫することによって疑似実験的な状況を作り出し，比較によってフィールドの現象のメカニズムを検討する過程を考える．いずれも，仮説を検証するときの重要な方法である．

第4章では，インタビュー調査について考える．聞き取りの記録は，読み物としてはおもしろいが，いざ論文とするためにはどうすればよいかわからなくなるものである．本章で題材とした論文において，論文筆者は，参与観察や聞き取り記録だけでなく，自らが商売人として商売に従事し，その実践の中で得られた理解をもとに論を構成している．曖昧で矛盾に満ちた聞き取り記録をさまざまな側面から検討することで，はじめて，筋の通った理解に到達することができることを示す．

第5章は，学際的研究について考える．フィールドワークによる研究は，すべからく学際的研究にならざるを得ない．というのは，現実の人間社会はさまざまな要因が複雑に絡み

合うだけでなく，現在進行形で変化しており，それを理解するには，どうしてもさまざまなディシプリンを超えて考察することが必要になるからである．学際的研究の第一歩に何が必要なのかを考える．

第6章と第7章では，サーベイ型調査と事例研究について考える．質問票調査のように，できるだけ広域から多数のサンプルを選んでデータを取得するサーベイ型調査のスタイルと，事例研究のように，定点で長期間滞在し，事例の数は少ないものの，その事例に関するさまざまなデータを取得する調査のスタイルは，データの取得方法から見れば，両極端にある．

まず第6章では，サーベイ型調査について考える．広域に分布する多数のサンプルからデータを取得するサーベイ型調査の本質は比較にある．多数のサンプルを比較することに由来するメリットとデメリットについて考え，デメリットを克服するための工夫について考える．

第7章では，事例研究について考える．事例研究とは，事例そのものの問題に答えることを目的とした研究ではなく，事例の深い理解を通じてより一般的な問題に答えることを目的とした研究である．事例そのものの研究ではなく，事例研究であるための工夫について考える．

第8章では，ある特定地域を対象にしたフィールドワークによる研究から，より汎用性の高い一般的なモデルを構築する過程について考える．個別の事例で得られた知見を，世界の多くの人に向けて発信するための工夫について考える．

以上が，本書の構成である．フィールドでの発見から一般的なモデルの構築までを段階的に配置してあるが，実際のフィールドワークによる研究の過程は，そのように段階的に進むものではない．現場での気づきが，研究上意味のある発見なのか，単に研究者個人にとってめずらしかっただけなのか

は，最終的な成果が何であるのかをわかっていなくては判断できない．一方で，最終的な成果として示される一般的なモデルは，分析したデータをまとめる段階で構築しようとするものではなく，調査のデザインを決定しデータを取得する最初の段階から考えておくべき事柄である．その意味において，フィールドワークによる研究において，発見から一般的なモデル構築までの一連の過程はひとつづきの過程であり，常に行ったり来たりする過程であると考えてよい．

掲載論文について

本書では，実際の研究論文を題材にしている．題材にするとは，フィールドワークによる研究のプロセスを議論するため，既発表の研究論文を利用させてもらったという意味である．本書を読んでいただければわかることであるが，決して論文そのものの優劣を判断しようとしているのではない．それぞれの論考は，研究論文として査読者によるレビューを経ており，十分に学術的な価値のあるものばかりである．しかし，本書では，論文筆者の言いたいポイントに必ずしも焦点をあてているわけではない．時には本書執筆者の「フィールドワークのプロセスを議論する」という意図により，論文の趣旨と異なる点で議論を進めていることもあるかもしれない．論文そのものの内容について深く知りたい方は，ぜひ原文にあたっていただきたい．

本書に収載した論文の内容は多岐にわたる．対象とする地域がアジアからアフリカにかけての広範囲におよぶだけでなく，自然科学から人文・社会科学までさまざまな分野にまたがっている．フィールドワークによる研究の広がりを示すものであろう．

本書で取り上げた論文は，可能な限り，執筆者らの身近な分野，身近な研究者の論文から選んだ．詳しい調査方法や，調査時の失敗など，論文には通常記載されることのない内容

にまで立ち入って質問することがあったためである．そのため，本書で題材とした論文の分野や採録した論文掲載誌にある程度の偏りがあることは否定できない．こころよくフィールドワークによる研究の舞台裏を話してくれた論文筆者の方々に，この場を借りてお礼を申し上げたい．

また，題材とした論文の文章を，本書では，省略・要約・短縮・付け加えなど，さまざまな形で引用させていただいている．さらに，とくに明示したほうが本文を読んで理解しやすいと判断された場合を除いて，引用符などを用い，題材とした論文からの引用であることを示さなかった．これはひとえに読む時の煩雑さを省きたかったためであることを，論文筆者の方々にご理解いただければ幸いである．

（柳澤 雅之）